

幽齋殿  
III

現象無し、の果ての果てに。

全ての、真善美なるものは、吾れの吾れなるものが顕われている相なのである。

あらゆる芸術家の表現した美またはよろこびは、私の私なるものを表現しているのである。あらゆる学問における真理の探求は、吾れの吾れなるものを探求している相なのである。あらゆる宗教のあらゆる説法なるものも、神さえも、實相さえも、吾れの吾れなるものをあらわしている相なのである。宗教の宗教なるは、この「吾れの吾れを生くる」とにあるのである。花も草も木も、山も川も、色も音も、人もそのよろこびも、すべての善なるものは、吾れの吾れなるものがそこに顕われているのである。

この吾れの吾れなるものの顕われとして観ずることが、全てのものに和解し感謝し礼拝していることであり、観世音菩薩すなわち尽十方無礙光如来として拝んでいることなのである。他のよろこびを自分のよろこびとすることは「このことなのである。

花が咲いているのは自分が咲いているのである。

### 『心』は宇宙に満ちる實質

と聖經『甘露の法雨』には歌われているのである。

神の『心』は渾へての渾へてなる實質であり、實体であるのである。そのほかには何もなき實在そのものである。その渾へての渾へてなる神なる『心』なるものが「吾れは汝より生れ出でたるものであります」と私の私なるものに宣り給うているのである。これが『心』すなわち渾へての渾へてなるもの即ち神と神の国が「汝らの内にあり」と真理みづから、神みづからが宣り給うていることなのである。

神みづから「私は汝らの内にあり」と宣り給うているのである。

「汝らの内に神の国はあるなり」とは、神および神の国がみづから「吾れは汝より生れたるものなり」と私の私なるものを神の世嗣<sup>よ</sup>嗣<sup>ご</sup>とてあがめ給うていることであるのである。

はじめのはじめ、即ちひととなるものほど渾へての渾へてであり、ひろびろと在りて在るものはないのである。ひととは渾へての渾へてることである。至小無内、至大無外がひととことごとくである。無限なるものがひととことごとくである。絶対なるものがひととことごとくであるのである。その外にあるものなし、がひととことごとくであるのである。

渾へての渾へての感じがひととことごとくであるのである。

神我一体、自我一体、萬物同根とはすべてのすべからざることなのである。

すべてのすべとは、天地一切萬物が自分の内にある、とことごとくである。天地一切萬物、全宇宙が自分の中に感じられるのがひととことごとくであるのである。

ウグイスが鳴いている。自分の中で鳴いているのであり、自分が鳴いているのである。

すべてを集めて一つとしたのが、まことのひととことごとくではないのである。はじめのはじめから、在りて在るものごとく、ひととなるものであり、はじめのはじめから渾へての渾へてであるものごとくとなるものなのである。

はなればなれの多数を集めて一つとしたのは、相対であつて、それ自体絶対でなく、渾へての渾へてなるひととことくなるものではないことを意味しているのである。

ひととことごとくははじめのはじめであり、渾へての渾へてなるものがひととことなのであり、それより先きにあるものなし、のはじめのはじめを意味するものごとくである。

一体(ひと)と心(感)とは渾へての渾へて感であるのである。一体(ひと)と心(感)が渾へての渾へてであるのである。自と他が先ずあつて一体(ひと)と心(感)となるのではないのである。一体(ひと)と心(感)がはじめのはじめであり、渾へての渾へてなのである。

天地一切萬物と一体(ひとつ)である以上、天地一切萬物ごとくこの本体は私自身であるのである。天地一切萬物の奥底を徹見すれば私が輝き出で来るのであり、自分自身を発見するのである。

それ故、神のご本質を觀ずれば、その中心から私なるものが輝いているのである。

「住吉大神すべてを浄め給いて、天照大御神出でましぬ」とは、偉大なる天照大御神のご誕生に立ち合っていることであり、その天照大御神の中心に自分の自分なるものが輝いている、その自分の自分なるものと出逢っていることであるのである。

すべては自分であつたのである。一体(ひとつ)とは渾べての渾べてである以上、渾べての渾べては輝いて私の顔をしているのである。それ故、人は自分の中を歩き、自分の中で神想觀をし、自分の中で聖典、聖經を拝誦し、自分の中において、その中心においてすべてのものの拝みの姿にふれるのである。

宇宙の根源としての自分。

渾べての渾べてとしての自分。

自分無き自分。

咲き出で、咲き出づる自分。

尊師、生長の家の大神、神々、諸佛が自分の中で、内なる中心において、神想觀を為し給うているのである。

また、その姿が自分の自分であつて、自分もまた自分の中で神想觀しているのである。

自分無き自分は神そのものであり給い、渾べての渾べてであり、天地一切であるのである。

それ故、天地一切のものに感謝するとは、自分の自分に感謝していることであるのである。

神は神社を生み給い、そこに参拝する人を生み給いて、ご自分でご自分を拝み給うているのである。

あるいは「招神歌」を生み給い、神の子を生み給いて、ご自分自身でご自分自身を招び給うているのである。それ故、釈尊が「山川草木国土悉皆成佛、有情非情同時成道」と拝み給うた時は、天地一切萬物であるところの私の私なるものを拝み給うていた姿であり給うたのである。

「はるばると目路の限り眺むるに十方世界悉く神なり」と神想觀され給うとき、大聖師は十方世界であり、神であるところの私の私なるものを觀し給い、拝み給うていたのである。

“釈迦、イエスを完成した”ということは、釈迦、イエスを生んだのが自分の自分なるものであるということである。

“神を見出し出した”ということは、神を生んだのが自分の自分なるものである、ということなのである。

斯く神の神なるものは吾が内にあつて書かせ給うのである。

「吾れを見しものは神を見しものなり」とイエスは宣り給う。即ち「神を見しものは吾れを見しものなり」ということである。

それ故、「神をとなえしものは、吾れをとなえしものなり」である。文字にて「神」を読み、神想觀にて神をとなえ、觀し想うとき、吾れを見ているときであるのである。その時、吾れもまた、神をとなえて吾れの吾れなるものを見ているのである。

天地一切のものの中の神または神の子として念じ、となえている時は、そこに私は自分を念じ、となえている時なのである。「はるばると目路のかぎり眺むるに、十方世界ごとく神なり」とは「十方世界ごとく吾れなり」ということなのである。

「高天原に神詰ります」とは“感謝詰ります”ということであり、「天照大御神出でましぬ」とは「ありがたい!!」なるもの出でましぬ、ということであるのである。「高天原に鳴りませる神」とは「ありがたい!!」なるものの無限振動を意味しているのである。また、イザナギの大神から天照大御神がお生れにられたということは、イザナギの大神が「ありがたい!!」なるものを無限振動し給うたことなのである。

光りとよるこびとは「ありがたい!!」なるものの無限振動であるのである。

雷が鳴っている。「ありがたい!!」なるものが鳴っているのである。

花が咲いている。「ありがたい!!」なるものが咲いているのである。

その「ありがたい!!」なるものは自分自身のことであるのである。

「無い」とは光りであり、「ありがたい!!」であったのである。

「有り難い」とは、すなわち字のごとく、「無」のごとくであり、「無」のごとくであったのである。

自分の無いこと、自分は無いことの澄み切りが「ありがたい!!」なるものなのである。澄み切りの真空の中に天地一切萬物が存するのである。それ故、自分なき澄み切りの「ありがたい!!」なるものは天地一切そのものであるのである。

霊なるものとは何であるか。霊なるものとは「ありがたい!!」なるものであるのである。

實在の實とは何か。實とは「ありがたい!!」なるものそのものである。そのものとは当体ということであるのである。

「ありがたい!!」なるもののひろがり天国であり、極楽浄土であるのである。

神とは「ありがたい!!」なるものであり、神の国とは「ありがたい!!」なるもののひろがりであるのである。

「有り難い」は無いの無いであり、幽の幽なることを意味しているのである。

「住吉大神、全てを浄め給いて、天照大御神出でましぬ」とは、住吉大神のお働きによって、余計なものは全てとりはらわれて天照大御神なる「ありがたい!!」なるもののみとなったことを意味しているのである。

完成とは「ありがたい!!」なるものそのものであるが故に、「ありがたい!!」なる感謝の神示である「大調和の神示」は「完成（ななつ）の燈台の点燈者の神示」となっているのである。神想観の結論が感謝であるのも、神想観は完成そのものであるからなのである。「光りは東方より」ということは「光りは当方より」ということであり、当方とは「ありがたい!!」の当体である自分の自分の實相をいうのである。

無量のありがたさよ!!

『心』は宇宙に満つる實質』と聖経『甘露の法雨』には書かれているのである。宇宙に満つる實質とは「ありがたい!!」なるものそのものであるのである。

真善美、あらゆるよろこばしきものの根源なるものは「ありがたい!!」なるものである。天地一切すべてのすべては「ありがたい!!」なるものの展開であるのである。

「ありがたい!!」は渾べての渾べてであり、自分の自分なるものであるのである。

「ありがたい!!」なるものが光りなのである。



「君自身が音楽である」という人は「君自身が感謝である」と言っていることなのである。すべて感謝するときには「君自身がそれ自体である」からであるのである。

「君自身が真実それ自体である」と言ったのもこれと同じ意味なのである。すべて他人ことではないのである。他人ことでないことこそが真実であるのである。

すなわち「今・こ・吾れ」が渾べての渾べてである、といふことである。

尽十方世界から中心であることを味わうこと。その中心が渾べての渾べて、すなわち神であることを味わうこと。莊嚴の莊嚴。うれしさのうれしさ。感謝光榮無限なるものを想うのである。

捨てるのではなく、むしろ實相において、一切が満足されていることを味わい、受くること。これが現象をはなれる道であるのである。満足されているところに、握っている手が開らぬのである。

神意そのものが成就であり、實相そのものが成就であるのである。

神は渾べての渾べてであり給うが故に、成就そのものであり給うのである。萬物發生の枢機を握る「今」こそ成就なのである。

神の子は

かの天人が天界を遊行するが如く、

また海魚が水中を遊泳するが如く、  
光の世界に光りに満たされ法悦に満  
たされて遊行す。

なのである。

天界が自分であり、水中が自分であり、光りの世界が自分なのである。

吾れも彼も無し。ただ一つなる渾べての渾べてがあるのみである。それをまことの吾れの吾れというのである。それが神にまします吾れであるのである。神すなわち吾れは渾べての渾べてにましますことを、吾が内なる中心に礼拝し奉る。礼拝するのまた、神(すなわち吾れ)にましますのである。

神が神を礼拝し給い、吾れが吾れを礼拝するのである。

更に天地一切萬物と偕に吾れは吾れなる中心なる神なる渾べての渾べてなるものを礼拝するのである。

天地一切萬物は、吾れなる一つなるものを吾れと偕に礼拝し給うのである。

神想観の一つである、「蓮華日宝王地観」において宇宙大の日月輪の中心に坐し給う「觀世音菩薩は自分自身なり」と念じ、観ずるのである。それ故、「自分自身なり」ととなえるのであるから、それを念じ、観じている自分は觀世音菩薩であり、吾れが觀世音菩薩であることは自然、当然なことである。最初に「吾れ觀世音菩薩、五蘊皆空と照見す」とはつきり宣言せられているのである。觀世音菩薩が觀世音菩薩をとなえ給うているのであり、神が神を觀じ給うのが神想観であるのである。

自分はどこにも無いのである。自分が無いということがまことの悦びであり、感謝であるのである。  
「すべての人に神を觀る」というのもまた、吾が内なる實在宇宙の中心にその人を神として神が觀じてい給う神のみコトバであり給うのである。

例えば、神想觀において、神を念じ觀ずる時、神を生んでいるのである。  
生長の家の大神、天照大御神、住吉大神、塩椎大神……等々である。  
それを神みづからが神の子人間に為さしめてい給うのである。幽の幽なるもの、神の神なるもの、はじめのはじめなるもの、澄み切りの澄み切りなるもの、消息である。これらすべて、生み生みなるもの、消息であるのである。  
幽の幽とは却つて、創造(うみ)の創造(うみ)なるもの、ことであるのである。

吾れを見しものは神を見しものなり。

神を見しものは吾れを見しものなり。

神はみづから、生む方であり給い、生んで貰う方であり給うのである。

神はご自分を生み給うのである。そして生んで貰う方でもあり給う。

久遠の吸う息、久遠の吐く息、同時現成。

クライマックスとは両極のもの、静かなる静かなる同時現成なのである。

「宇宙静かなり」が神想觀のクライマックスである。

アルファにしてオメガなるもの、はじめなきはじめにして、終りなき終りなる同時現成。至小にして至大なるもの。潮満つにして、潮干るなる如意なるもの、同時現成。

「如意宝珠觀」の「吾が全身光明遍照、十方世界光明遍照」。この遍照なるもの、同時現成。「する」と「られる」との同時現成。  
中心への帰一と、中心からの無限展開の同時現成。

久遠の吸う息、久遠の吐く息の同時現成。このクライマックスを想いつ息をすることが、神想觀での神の生かす力が「流れ入る。流れ入ること。静かに、静かに息を吸うのであります」と言われる導師のお言葉が想い起されるのである。神を生んだことと、神より生れ出でたることとの同時現成。ここに澄み切りなるもの、クライマックスが安らかに存するのである。

絶対と絶対を生んだものとの同時なる現成。

「ことばにて、無し」と言えるものをすべて、無し」とし、その「無し」をも、無し」とする。ところが胸が軽くなることであり、この胸が軽くなること、全身全霊が浄まっていることであるのであつて、このほかの道は不要なのである。他の道を歩む必要は全くないのである。すなわち、念々實相をはなれないということはこのことであり、中心をつかめば、他の道を歩むことは要らないのである。實相すなわち中心は今、渾べての渾べてであるからである。

「神の造り給える世界には悪は存在しない」ということは、「神の造り給える世界には現象は存在しない」ということである。

「光りよ光りせよ」という意味において、「感謝よ感謝せよ」と、神の子のいのちそのものである感謝なるものに向って讃え、拝み給うている神のみ心がコトバとなつてゐるのが「大調和の神示」なのである。

天地萬物は観世音菩薩すなわち尽十方無礙光如来にましまして、吾が内なる神の国、宇宙大の大日輪の中心に開らく蓮華の中心に坐し給うて、そしてさらに吾れをその合掌の中に持し給うてゐるのである。吾が内と言へどもこの吾れは、吾れ無き吾れであるのである。

斯くして、吾れ無き吾れの中心に大聖師谷口雅春先生が坐し給いて神想観を為し給うてゐるのが、大聖師の先導による神想観であるのである。その姿において大聖師は「生きたし生けるものを生かし給える御祖神」と吾れ無き吾れなる御祖神を呼び給ひ、招び給うてゐるのである。そして「神の無限の生かす力、流れ入る、流れ入る…」と吾れ無き吾れより流れ入ることを觀じ給うてゐるのである。

肉体人間は有限無常がその本性であるが故に、却つて、永世不死を恐れるのである。

その肉体人間もまた、その恐れも「私は無いのです」とのみづからの死に切りの澄み切りであるのである。

“在りて在る”ところのもの、如の如なるもの、即ち母の母なるもの、真如すなわち、まことの如なるもの。すなわちまことの吾れなるもの。

吾れなるものこそ本源なるものなのである。

本源なるものとは吾れなるものである。本も源も、吾れ今こなる、まことの吾れなるものなのである。吾れではない本源は無いのである。

母とはかぎりなき生み出しを意味してゐるのである。

本源とは生み出しであり、展開創造であるのであり、これが与えるというまことの意味であるのである。本源へのあこがれではなく、本源として生きるいのちである。

「住吉大神の龍宮無量寿のいのちにて、全身全霊浄めらる」とは、住吉大神がわが全身全霊を全身全霊し給うてゐることなのである。斯くの如くして、天照大御神が吾れにおいて全身全霊し給うてゐるのであり、塩椎大神が全身全霊し給うてゐるのであり、高天原が全身全霊し給うてゐるのであり、龍宮本源が全身全霊し給うてゐるのである。

「最早や吾れ生くるに非ず、神の無限の生かす力、ここにありて生き給うなり」とは、神が吾れにおいて全身全霊し給うてゐることなのである。

「神はすべての全べて」とは、神が吾れにおいて、全身全霊し給うてゐることなのである。

「畏くも宇宙の大神イザナギの命、筑紫の日向の光明遍照の實相の世界に身そぎ祓い給う」とは、イザナギの大神が全實在宇宙を全身全霊として、全身全霊し給うことを意味し給うのである。

「天照す御親の神の大調和の、いのち射照らし宇宙静かなり」とは、天照大御神が宇宙を全身全霊として、全身全霊し給うてゐることなのである。

「高天原に神詰ります」とは、高天原を全身全霊として、神が全身全霊し給うてゐることなのである。



人間の真性は先づ霊なる生命にして  
心の糸を組み合せて肉体の繭を造り  
その繭の中にわれとわが霊を宿らせて、  
はじめて霊は肉体となるなり。

と聖經『甘露の法雨』には歌われているのである。

霊とは神であり、渾べての渾べてであり、小さく肉体の中に宿るのではなく、先づ霊なる生命、神なる生命として宇宙大であり、實在の宇宙を掌中に握るところのもの一つのあらわれとして「われとわが霊を宿らせて……」なのである。神がわが全身全霊して給うすがたであるのである。

すべてを無として、この渾べての渾べてなる霊の領域に居る時、すべては光りであり、肉体も肉体にあらずして、光体であるのである。これが霊なるもの、ことばなるもの、即ち神なるものがわが全身全霊を全身全霊し給うているすがたなのである。

心は宇宙に満ちる實質、

『心』『そ』全能』の神にして遍在  
したまう。

との『甘露の法雨』の言葉は、心と神とコトバはひとつであり、渾べての渾べてであることを意味しているのであり、そのことを歌っているのが、このことばである。

この全能なる神、  
完全なる神の

『心』動き出でてコトバとなれば  
一切の現象展開して萬物成る。

とこの言葉が、あまのひびく。

またひびく、

萬物はこれ神の心、  
萬物はこれ神のコトバ、  
すべてはこれ霊、  
すべてはこれ心、

と書かれてくるのであり、神と心とコトバと霊とはひびくひびくあることが歌われているのである。